せたかむい
発行・古平町史編纂室
古平町文化会館 ☎42-2590
第153号・平成14年6月1日

年表で読む古平の歴史

《59》

商業はアイヌとの交易から始まった

■アイヌと物々交換

蝦夷地と言われていた時代には米はできませんでしたから、松前藩では上級の家臣たちへの給与として土地を貸し与え、その土地でアイヌの人たちと物々交換（交易）をし、その利益を家臣の給与の代わりにしていました。ですが、なんといっても商売などは苦手な武士のこと、生活に見合うような利益は上げられなかったようです。

そこで「もちはもち屋」というように、いよいよ商人の出番となりました。

商人は、一定の契約金（運上金）を家臣に払ってその土地（場所）を借り、家臣に代わってそこで交易を始めました。

これが場所請負制です。

■アイヌを使って漁業

運上金さえ払えばあとは自分の利益になることから、漁具などをアイヌの人たちに貸し与えて生産を上げさせ、交易を盛んにすることによって大きな利益を得ました。そのうちにアイヌの人たちを使って漁業なども始め、それによってさらに利益を増やしていったのです。

また、交易の品物や生産物は自分の船（北前船）で運ぶことによって、利益は莫大なものになりました。

■古平を開いた岡田家

近江八幡（滋賀県）の出身で、古平を開いたとされる恵比須屋岡田弥三右衛門（初代）は、四百年程前に松前に呉服や荒物（雑貨・家庭用品）、網などを本州から運んで来て販売するのが本業でした。古平場所を請負うようになると外に、米・塩・酒・小間物などの日用品を古平に運んで、漁場の人たちを相手に店を開いていたと思われます。

これが約二百五十年も続いて、岡田家から古平場所を譲り受けた種田徳之丞もそのまま商売を引き継いでいました。当時は一般の人たちの商売は許されず、岡田家だけが独占的に商売をしていたのです。

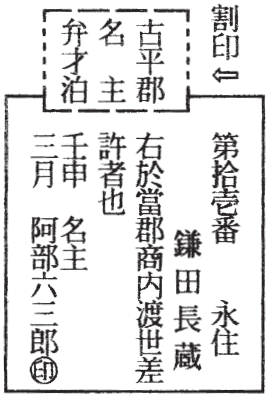
■商売も自由になる

明治になって場所請負制が廃止になり、漁業権も一般に解放されるようになると、商業も自由にできるようになりました。最初は北前船が運んできた品物を委託販売する程度で、それも行商によるものでした。

やがて資本もでき、行商していた人たちが店を構えるようになったのは明治五年頃から後のことのようです。

この頃は、古平郡内で店を出そうとすれば名主（村役人）の許可が必要でした。

ここに酒造業をしていた新地町・鎌田長蔵の鑑札があります。（明治五年＝壬申＝許可）



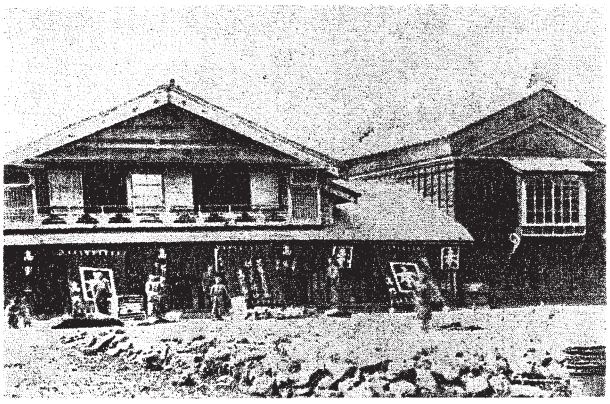
<新地町の旅人宿・料理屋>

■商店街が生まれる

明治一〇年頃になると、呉服・荒物・小間物・雑貨などの商店が相次いで開店しました。商品の多くは小樽や本州から仕入れ、さらに美国や積丹方面の商店や行商人に卸していました。

当然、物価は小樽に比べて一割から二割は高く、特に日常使う荒物類は割高でした。

移出品である海産物は、町内の海産商が北前船への商品の取り次ぎをしたり、直接、本州へ送る品物は小樽港を経て移送されていました。



＜浜町・高野呉服店＞

■仲買人が組合を結成

海産商などの仲買人を通して道内外に売り渡していましたが、仲買業者の円滑な売買や業者間の連絡を図るために明治十八年、古平郡仲買人営業組合が結成されました。

ここでは貨物の取り引きの際のルール作り、粗悪品の処置、売買手数料や倉庫保管料の取り決めなどの外、不正に対する罰則も定められていました。

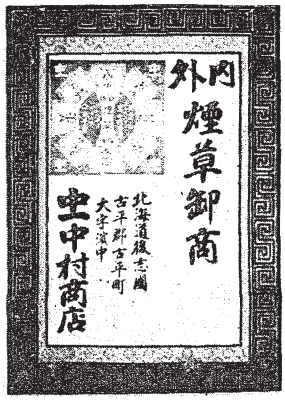
■人名録に見る商店名

明治二六年発行の『古平港実業人名録』には、次のような商店が挙げられています。

米穀荒物・廻船問屋　幾井舊七
米穀荒物・酒・茶商　河村了裕
米穀・海産・廻船　高野平治
米穀・海産・廻船　竹内半平
米穀・荒物・廻船　仲谷商店
荒物米穀商　長島米造
米穀荒物・海産仲買　名達文吉
米穀荒物・海産販売　藤沢勇蔵
精米一手販売　藤沢精米所
廻船問屋・仲買　広谷伝次郎
廻船問屋・水産業　広谷順吉
酒類醸造業　本間録郎
廻船業・米穀海産商　鎌田金蔵
酒類醸造業　鎌田酒造店
廻船業米穀海産商　今井平五郎
旅人宿　津田清兵衛
呉服太物商　高野常吉
呉服太物・金物類　高野名石蔵
呉服太物・荒物商　成沢平治
呉服太物商　山口金治
煙草・小間物化粧品　中村源治郎
呉服太物・西洋織物　佐野吾市
和洋小間物商　泉勇吉
銅鉄打物・金物商　今井誠一
和洋諸売薬商　山田喜作
薬種・和用紙類　古川慶太
和洋菓子製造業　上田駒蔵
廻船問屋・水産業　岩井茂兵衛
（以下 水産業者省略）

■煙草（たばこ）販売

アイヌの嗜好品に、酒の外にたばこがありました。嘉永四年（一八五一）の岡田家の記録に、「男のアイヌが仕事の切り上げのときには、上酒二盃、濁酒二盃、莨（たばこ）二把、間切（まきり）二本、（外に二品）」「役付きのアイヌに御上様より清酒小樽一つ、莨二把ずつ」



＜煙草広告・中村源治郎商店＞

などとあり、煙草は貴重品として特定の者に与えられていたようです。

明治八年に煙草税が制定になり、明治二一年には葉煙草専売法が施行されて、この年に中村源治郎が煙草の卸しと小売りも始めました。明治三三年になると『未成年者禁煙法』が施行になりました。

＜明治三七年・同三八年台帳
古平町浜町　長見商店＞

海辺の世相を風刺る

高野名幸作さんの日記から

【54】

〈大正十年〉

2／10　快晴、暖気になってきた。寒さもゆるんで日中は小春日和のようだ。永い冬ごもりから抜け出たようで気がせいせいする。カレ網は七日もナギが続き、赤ガレが多く掛かるようになったとか。スケソも掛かっているという。明日は学芸会があるというので、子どもたちも早く休んだ。

2／11　毎日のナギ続きでカレ網もあまり掛からないとのこと。今日は学校で拝賀式のあと、学芸会があるというので八時頃出かけた。九時から学芸会が始まったが、広い運動場がいっぱいの人だ。午前午後と四十種目以上の出し物がある。古英丸が来てアバ縄、ガラス玉が着いた。荷物も合計五十余個になる。夜、平田で、月二円掛けの和合会を組織しようということで協議する。十時に帰る。

2／13　禅源寺で花廻りがあり子どもを連れて出かける。佐渡から平安丸が入港する。網やアバ縄のほか味噌、わらじ、むしろなども着いた。値段の方も競争になるだろう。

2／16　天気快晴、暖気。上ナギで春らしい。浜へ出てみる。あと十日もすれば漁夫も入り賑やかになるだろう。店の方は割とひまになり帳簿整理などをする。同じ品目が各店に入ったようなので、アバ縄など値下げをする。

2／17　浜へ出てみたが今日も上ナギだ。注文のあった荷物を送りたいと保木回漕店へ行ったが、船がないとのこと、困ったものだ。カレもこの頃は値段が安く漁もあまり無いという。それでも今まで大漁で値段も良かったので、漁夫も親方も景気の方はいいようだ。

2／18　夜中、縁側のガラス戸が真っ白になっている。吹雪だ。だんだん激しくなってきたので表に板戸を立てた。今日の天気では刺網の客もないだろうと思っていたら、大地、[イ]、そのほかの客で七百間も出た。夜になり風も止み、静かな天気になった。

2／20　朝から大吹雪である。浜へ出て見ると、千五百トンもある汽船がこの荒天に出港。この湾内では危険と思って、小樽へ向けて出港したようだ。五、六千トン級の汽船はそのまま停泊している。十時頃一時晴れていたが、午後二時頃からまた吹雪く。定まらぬ天気だ。夜、水見大工のところへ行って店の仕事を頼む。

2／21　吹雪も止んで、船はみんな出た。カレ網もかなりの漁があるが、生魚の値段が安いというので意気込みがない。今年は一般に大漁であった。秋にはまた網や漁具の販売に活動せねばならぬ。新地方面へ行き用事を足す。力三郎のところへ寄って、しばらくいろいろ話を聞いたが大いに参考になった。タラ縄の注文がある。

2／22　天気快晴。浜へ出てみる。まだ町も山も真っ白で春らしくない。ニシン漁の漁夫が入り込むまでにはまだ間がある。漁期が近づけばまた賑やかになるだろう。

2／26 ＝（全文、次ページ）

2／27　朝から風が強く海は時化だ。店の方も建網で五百円、刺網も千間から出た。この分だと予定通り出るだろう。午後一時から学校で軍事講演会があり行く。聴衆も沢山集まっていた。

3／1　漁夫が沢山入り込み町中が活気がある。店も忙しい。余別、島泊からも来る。古英丸が六、七日ぶりで入港し、六十個程の荷物が着く。

3／2　建網の綿糸やアバ縄など取りに来る。十五、六日から投網するそうで、なかなか忙しくなる。荷物受け取りに馬車を頼む。貸売で千五百間程が出た。

3／3　今日は東宮殿下（後の昭和天皇）が渡欧されるとい

うので、家々ではみな国旗を掲げた。海もナギで春らしくなった。漁夫が雪切りをしている。店は八時頃から忙しくなった。目の回るような忙しさだ。現金で六百間、貸売で八百間出た。

× × ×

二月二十六日

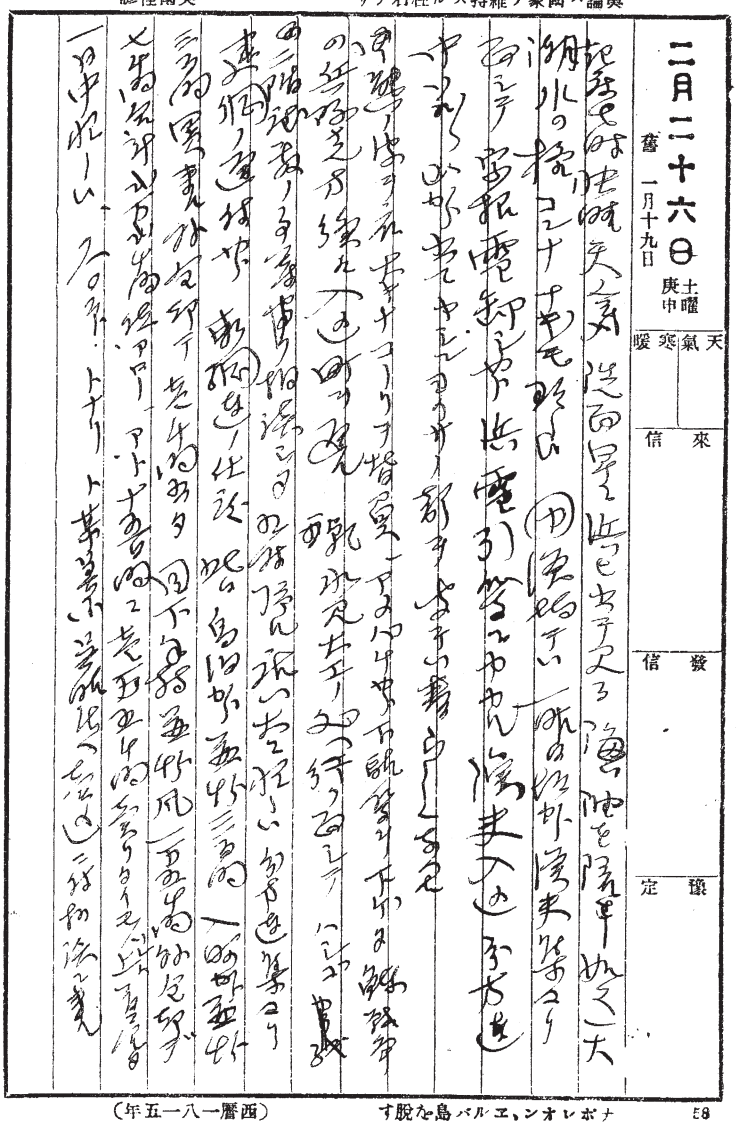
起床七時、快晴天気、洗面早々浜ヒ出て見る。海ハ油を流せし如く一大湖水の様、コンナナギモ珍しい。㋕漁場テハ一昨日頃から漁夫集マリ、而シテ家根雪卸シやら浜雪引き等ニカカル。漁夫入込、(*1)分方連中ソれく山から出て、ヤシンヨイサ(?)の聲ヲ聞テハ春らしくなった。熊ノ皮ヲ衣、大キナ(*2)コーリヲ背負ヘ、(*3)アメバチやら下駄等下ゲタ、鰊戦争の兵隊さん方続々入込、町ヲ通ル。朝、水見大工ノ処へ行ク、而シテ、ハシゴ[illegible]残の二階座敷ノ事等聞[illegible]相談シタ。九時帰ル。店ハ大ニ忙しい。分方連集マリ、建網の(*4)通付けやら刺網連ノ支度。此日島泊から並45三百間、入舸から並45三百間買来ル。外全部テ壱千間出タ、目下、手持並45凡一万五千間、外全部デ七千間、合計弐万弐千間位アロー、アト十五日間ニ壱万五千間売リタイモノ、ソレハ上首尾タ、一日中忙しい、各○□□(屋号、二字? 不明)トナリ、ト某美国呉服店へ売込ニ付相談ニ来ル。

【註】*1 分方＝ぶかた(歩方)、歩合制による共同経営の方法で、明治二十年代に始まったといわれ北海道の鰊場での独特の経営方法でした。漁業権を持っている親方と漁夫とが一定の歩合で分ける制度で、その分け方にはいろいろな方法が組み合わされています。

*2 コーリ(行李)＝竹や柳で箱形に編んだもので、旅行の荷物を入れた。

*3 アメバチ(飴鉢?)＝津軽名物の水飴の入った缶。

(*4) 通(かよい)＝買い物用の通帳。



古平いろはうた

く クマ遊ぶ熊野神社の名の由来

明治一〇年(一八七)、青森県三戸郡から工藤末松が泥の木川川尻に入植した頃、鰊場に出稼ぎに来ていた人たち中で、副業としてすでに付近でも農業をしていた人がいたようで、それより市街地に近い鴨居木では明治五年にはもう入植者がいました。

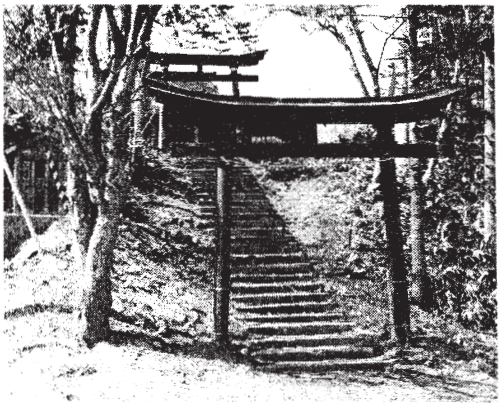
その後、同じ青森県出身の佐々木三太、佐藤吉助、続いて木村彦松が入植し、それを頼って木村喜蔵・山田馬助・上野善之助・金沢松の助・内山治郎吉・上野与八・内山三の助らが入植して開墾に当たっていました。

大正三年の戸籍調査ではさらに増えて、工藤富五郎・夏堀カツ・小森吉松・大原養作・鶴谷寅次郎・鶴谷紋太郎・中野由松・原子松五郎・原子三郎・木村石松・永井佐太郎・上野ハル・木村春吉・小枝末八らの名前が見られます。明治一九年の記録では「九〇余町歩(ヘクタール)が開墾され、農家が一村落をつくっている。しかし、栽培法などが不十分でこれについての改良を要する。」とあります。

作物はジャガイモや大豆、ソバ、アワが主で、それにトウキビ、大根などで、野菜類は市街地に近いところで多く栽培されていたようです。

＜熊野神社社殿前の掲額＞

ところで、泥の木川周辺には秋になるとクマが出没し、毎年のようにせっかくの農作物を食い荒らしてしまいます。そこで地域の人たちは農作物をクマの被害から守るために、クマ除けに『クマ』を祀る小さなお堂を建てたのです。最初は、木の切り株の前に供物を飾って祈願したといいます。

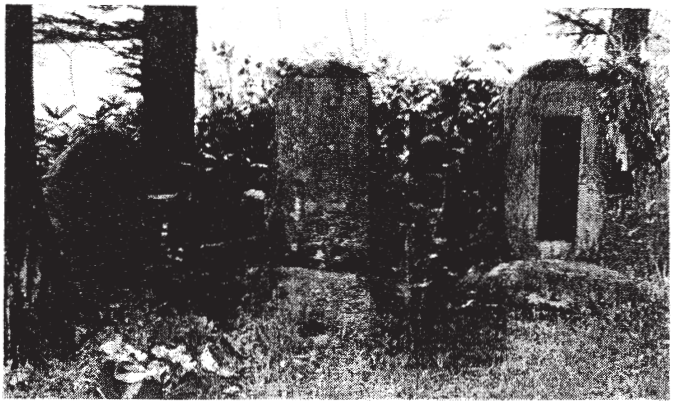


＜熊野神社＞

そして、クマを祀ったことから、熊野三山本宮の祭神である食(け)の神・須佐能男命(スサノオノミコト)を祀ることになりました。

もともとクマの神社であったことから、祭神にもあやかって『熊野神社』としました。

大正一四年、たまたま三山神社(一四九・一五〇冒参照)が恵比須神社に合祀されることになったことから、木村長之助の寄付金でその社殿を買い取って現在地に移築し、その後、社殿を増築して部落の集会所も兼ねるようになりました。※(8ページへ)



＜境内の記念碑と庚申碑＞

マンガンで稲倉石は日本一

雪中の山越え　明治一三年一月、茅沼炭鉱の技術指導に来ていた英国人エドワールド・パレーが、炭鉱の関係者一〇数人と、岩内から古平へ雪の山越えをしました。これは、冬の岩内での石炭の荷役には困難が多いが古平の湾内は比較的安全で、冬も船の出入りが容易だと聞いていたので、茅沼の石炭を古平に運ぶことを考えたからです。

ところが、真冬の積丹半島の気象条件は厳しく、深い雪と猛吹雪に方角を見失い、五日になってようやくきこり小屋を見つけ、その近くにあった一軒の人家にたどり着いて九死に一生を得ました。そこが、後の稲倉石鉱山を発見したという大井嘉蔵の家でした。

大井嘉蔵が金鉱の露頭を発見　これが縁で大井嘉蔵は鉱山技師であったパレーから、この地域に多い金・銀・銅などの鉱石の見分け方について指導を受けたようで、それで明治十八年、猪股五平と一緒に材木を川に流しているときに、偶然、露出している金鉱石を発見したものと思われます。

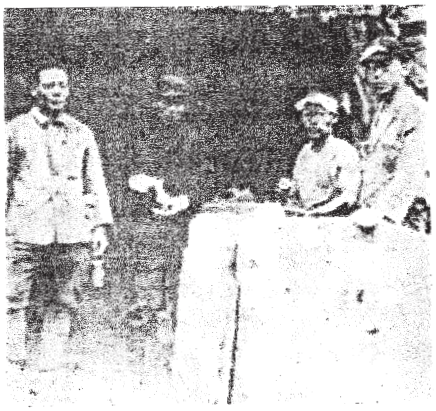
砂金のように光り輝いているものならともかく、金を含有している鉱石であることを知っていたということは、それについての何らかの知識があったと考えられます。

共同で鉱山を経営　金鉱の露頭を発見したときもう一人、和田清作もいたと伝えられていますが、その後、発見者の名前から大股鉱山と名づけ、三人が共同で、手掘り程度で試掘していましたが間もなく資金難から中止しました。

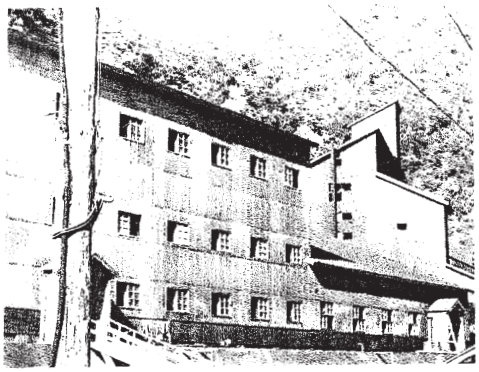
明治二二年、北海道鉱山株式会社がこれを買収し試掘しましたが、金よりも銀の含有量の多い鉱石が見つかり、金・銀・銅の鉱山として本格的に採掘を始めました。

一時期には従業員が三百人を数える程の盛況でしたが、日清戦争後の不況から経営が悪化し、明治三三年、ついに鉱山は廃坑になりました。

鉄興社が買収する　その後の鉱山は、経営者が代わったり休山になったりしていましたが、昭和四年、荒れ果てたようになっていた鉱山を鉄興社が買収しましたが、そのときの金額は一万二千円だったそうです。この二年前の昭和二年、古平町役場（現庁舎）が新築されましたが、その金額は三万五千余円でした。



＜坑道の入口付近＞



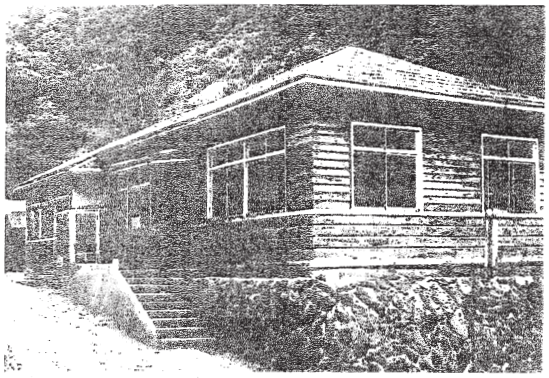
＜新方式の浮遊式選鉱場＞

当初は従業員二二人で粗末な住居に生活し、探鉱をしながら試掘をし、簡単なごく小規模な設備で選鉱や焙焼（ばいしょう）をしていました。

金の含有量の多い鉱石はありませんでしたが、菱マンガン（ピンク色をしていたことから別名さくらマンガン）といわれる良質のマンガン鉱石が多量にあることが分かり、本格的な採掘が始まりました。

軍需産業として大発展　昭和一三年頃から戦争の拡大によって鉄鋼の需要が増え、

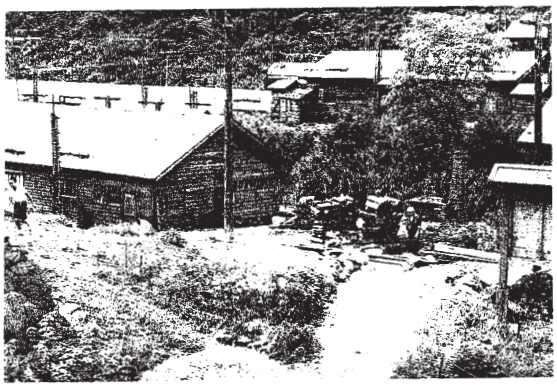
それに伴って、鉄の精錬に欠かすことのできないマンガンが不足してきました。それまでは海外からの輸入に頼っていましたが、輸出の禁止や旧満州方面からの輸送も難しくなり、国内でのマンガンの生産が重要課題になってきました。このような状況から鉄興社では国の援助を受け、鉱脈の探査や開発、機械化の導入、労働力の強化などを図って増産体制に入り、その生産高は東洋一ともいわれました。



＜改装された旧事務所＞

戦後の好況で発展　終戦間近の昭和二〇年七月、北海道一帯に来襲した米軍機の攻撃を受けて、作業中の鉱石積み取り船射水丸が沈没、作業中の二一人が痛ましい犠牲になりました。

鉱山は戦後に一時休業しましたが、戦後の復興と共にマンガンの需要も増え、再び戦時中を上回る活況を呈するようになり、昭和三四年は生産額約三億二千万円、古平町の総生産額の約四〇パーセントを占める程でした。最盛期には稲倉石の人口も一千人を超え、昭和三六年には小中学生が二七〇人を数えました。



＜戦後の鉱業所の一角＞

＜短い夏を盆踊りで楽しむ＞

経営不振から合併・閉山　鉱山の宿命として、掘ることによって資源が次第に枯渇するのは仕方なかったが、稲倉石鉱山も採掘現場が遠くなることで経費がかさみ、それに海外からの安いマンガン鉱石が入って来て価格が低迷、それが経営を圧迫するようになり、昭和四五年、北進鉱業（日本鉱業の子会社）へ売却、合併することになりました。

その後、規模を縮小して然別鉱山と共に生産を続けて来ましたが、鉱山関係の不況から、昭和五九年、ついに閉山が決まりました。

鉱山の発見から約一二〇年、稲倉石鉱山として七三年の歴史をここに閉じました。

＜地域総出で川の清掃・環境優良地区の指定を受ける＞

調子のいい日は一〇本ぐらい切るそうですが、寒中の山の中での仕事は大変だったようです。

また、僅かな網ですが、鰊時期には鰊刺網をしたこともあります。そのときは、冬に網修理などをしていました。刺網は共同でやる人もいましたが、余程うまくやらないと人間欲がからんでくると争いになり、それで親戚同士でけんかになったという話も聞きました。

◇農作業の合間の稼ぎ

畑の方は川が多く、季節になると魚が遡って来ます。春先から秋まではヤマベ、夏ごろはアユ、秋になるとウグイ、ウグイの卵を漬けるとマスのすじ子に負けない味です。

ヤマベはさっと焼いてから五、六尾をわらで結んで吊るしたものを料理屋に持って行くと、一つら二〇銭ぐらいで買ってくれるので、町からの帰り、そのお金で砂糖やしょうゆ、とうふなどを買って来て食事も少しは変わったものになりました。

◇食べ物の工夫

一般の農家では、調味料として砂糖やしょうゆ、酢、油などはふだんは使わなかったし、何をするにも自家用として造っているみそと塩だけです。

じゃがいもは作っていてもそれはみんな売り物で、売り物にならないような小さいものを食用にしていました。山からワラビやカタクリの根を掘って来てでんぷんを作ります。

ワラビは鰊がまのような大きな鍋に入れてかき回し、軟らかくしてから干す。それをわら打ちの木槌で叩いてふるいで通し、何回か繰り返して細かくなったら桶に入れて水でさらす。でんぷんは底に沈んでたまるが、鍋いっぱいのワラビで三升ぐらいもとれたかなぁ。

カタクリは根が深いのでくわで掘り、おろし金を二枚合わせたような道具を作ってそれでおります。あとは水を入れてさらすのはみんな同じです。カタクリのでんぷんはポタポタしていて、食べてみると甘味があってうまいもんでした。でんぷんのことを片栗粉と言っていますが、ほんとにカタクリのでんぷんは最高でした。今からみるとずいぶん高級な食べ物だったと思います。

ササの実も食べました。胸から大きな袋を下げてササの実をとっては入れ、そのまま蒸します。皮を取ってから石臼でひいて粉にし、外のものと混ぜてだんごにして食べました。

クルミやエゴマをすり鉢ですってそれをだんごや餅につけたり、また、だんごや餅を串に刺してみそをぬり、それを焼いて食べたものですが結構うまかったようです。

（次号へ続く＝季節ごとの行事と食べ物）

【註】昭和一二年頃（日中戦争が起きる）の物価

白砂糖　一斤（六〇〇g）二五銭
しょうゆ　一升　五〇銭
卵　一個一〇銭　焼酎一升一円
とうふ　一丁五銭　入浴料　六銭

・

一二ページが好評で増ページしましたが、編集の都合で［古平町史年表］を休みました。木村シゲさんの談話は次号に続きますが、別な新しい話題も載せる予定です。

※（5ページから続く）

また、石段は、町内の壊した石蔵の石を部落民が運んで来て作り上げ、鳥居は、戦後、恵比須神社の鳥居を建て替えたときに古いのを移築したものです。

小高い丘の上に建つ熊野神社の境内には、開村五十年と開村百年記念碑、それと木村彦松が旧六志内道路登り口にあったのを移設した庚申碑があります。

熊野神社の例祭は九月一日で、戦前には境内に舞台を作って踊りや芝居なども催したり、戦後も子どもの相撲などが奉納され、昭和四〇年代までは祭典行列も行われていました。

祭典は部落総出で祝い喜び、今年の収穫に感謝すると共に豊作への祈願をし、神社は部落の中心的な存在でもありました。

しかし、その後の厳しい農業経営の実情から農家人口は減少し、地域の高齢化なども重なって神社の維持や運営も次第に困難になり、最近は琴平神社祭に合わせて祭事を行うようになりました。

木村シゲさんの話る
戦前の農家の暮らし 上

◇八七歳で今も畠仕事

泥の木に生まれて、二十歳のときに同じ農家に嫁ぎました。昭和一〇年です。水田も自作農（自分の土地で耕作）の人は余裕もあったが、小作（耕地を借りて耕作）の人は苦労が多く、生活も戦前、戦中、戦後とすっかり変わってしまいました。この歳になると、今の世の中のことになかなかついていけないことがあります。それでも元気で夏は畑仕事に精を出しています。今ちょっと腰を痛くして、それで今日は娘にトウキビの種まきに行かせたとこです。昔のことを考えると夢みたいです。

◇クリームつけて姑が文句

その頃はどこもそうだったけど姑（しゅうと）がうるさくて、嫁に行って間もない頃、ふろから上がってクリームをつけたら姑が側に来て、「クンクン…」匂いをかんでから、

「なんだ、このにおえ？」

と言いながらジロリッ。

姑がいなくなるとうちの人は「うん、うん、エエにおいッコだナ」と、ニヤニヤ…。

田舎では女の人が化粧することなんかめったになかったし、せいぜいクリームをつけるぐらいのもの、店に容器を持って行くと量り売りのクリームがあって、びん入りより安かったのでそれをたまに買っていた。

その頃は、化粧するのは芸者さんのような客商売の人か、なにか特別のときぐらいでした。

◇家のかまどを譲られる

二二歳になったときのこと。姑が突然、「これからはあんたサかまどを譲るから、ちゃんとやってけれ。」

と言って、姑は五円札一枚を出した。

「かまどを譲るから…」と言われても、両親、ダンナの兄弟四人と私たち夫婦の八人家族、なんぼ食べるものは作っていても、五円札なんかふだん見ることもなかったが、これでは二か月ぐらいの生活費にしかならない。どうやっていったらいいのかと、ほんと困ってしまった。

【註】を参照

ダンナは酒は飲まなかったがたばこは禁止。今までもそうだったが、とにかく買うものをうんと少なくした。ただ不幸があったり、祝言やその頃は入営（軍隊）などがあれば支出のあるのは仕方なかったが、やれば何とかなるもんで、まぁ今までどおりどうにかやることができました。

◇冬山の仕事

農家では秋の収穫の時期までほとんど収入は無い。季節の野菜や、お盆の頃花などを売りに出る人もいましたが、それらは市街地に近いごく少ない農家の人でした。

農作業の暇をみて出面に行くこともありますが、男でよくて一日一円二、三〇銭、女だとその半額でした。

冬の農閑期には自家用の薪の切り出しの外、材木の切り出しがありました。

＜縄やむしろ作りなどの外
わらぐつ作りも冬の仕事＞

朝、真っ暗な六時頃から出かけて行って帰りは晩の六時過ぎです。その頃は稲倉石鉱山の坑木にする落葉松を切っていましたが、一本切り倒すと五銭、枝払いをして五、六尺の長さで三本に切ってそれで一〇銭、一本で一五銭になります。

「オレ、今日は一円五〇銭稼いできたぞォ！」

やっちゃんと蓬（よもぎ）だんご

大澤文子

「いいなァ・・・また作ってご馳走してねェー。電話待ってるヨー」

仲良しのやっちゃんの声が今でも聞こえてきそう。あれから何十年経ったであろうか。鼻にかかったやっちゃんの声が忘れられない。

五月の海の空は和らぎをみせ、飛び交うごめの声もとみに優しかったあの頃。まして、背に受ける陽ざしも快かった。

私は年中行事の如く毎年五月になると、家人たちの目覚めぬ朝早にそっと足音を忍ばせ、手籠一つ持ち、裏戸を開けて、歌でもうたいたい気分で道路下の草野へ駆け下りて行く。

雲間をもるる陽はまだ淡くつめたい。だが畑地わきの草野には蓬のおさな葉が、はやところせましと伸びたち汐風に揺れている。蓬独特の淡い香りをわがもの顔に放ち続けて。ああこの香り！　私は呆けたように立ちすくむ。だがいつまでも夢心地にひたっているわけにはいかない。

「みんな起きたかなぁ」

心は家人たちを思い、はっと我にかえる。

手籠いっぱいの蓬を抱え、急ぎ坂を駆け上がる。時間を気にしつつそっと裏戸を開ける。だが家の中は物音ひとつしない。ホッとして、台所に広げておいた新聞紙の上に蓬を置き、再び足音を忍ばせ裏戸を出る。もう一度摘んで来よう・・・と。

雲間をやや離れた陽は暖かい光をわずかに放ちはじめていた。二度目の手籠に蓬を摘み終えると、また急ぎわが家へ戻る。今度は家人たちの話し声がしてホッとした。

「蓬摘んできたのよ」

声をかけてみたが関心もないのか、

「ああそう」

朝食をすませ、それぞれ家人たちの出かけたあと、私はゆっくり蓬の始末にかかる。

ひと葉づつもいで水洗いし、大きな笊にあげて水切りをしておく。大鍋に湯を沸かし重曹を二、三匙落とす。蓬を入れてさっと茹でるとみるみる緑色と化す。冷水でよく洗いあく抜きをする。なお一晩冷水につけておく。私の指もあくに染まりうす茶色になってしまう。

翌朝はまた早々に起き、一晩水につけておいた蓬をよく洗い固くしぼって置く。その後はいくつかに小分けした蓬をワンラップにくるみ冷蔵庫に入れる。香りも損なわず便利なので、私流かもしれないがそのようにしておく。

来客の多いわが家では、よく蓬だんごを作る。小豆の餡は常に作っておいた。若い頃はまあ手まめの方だったのでは・・・と日々思うことがある。

仲良しのやっちゃんの好む蓬だんごは自己流で、白玉粉七、上しん粉三の割合でこねる。蓬は擂り鉢でよく搗いてから混ぜる。餡をくるみ並べて蒸す。蒸し上がっただんごを、丘から折ってきた笹の葉に一個ずつ載せる。ふかふかの蓬だんごはわが家の名物だったらしい。

× × ×

この宵も遅くまで蓬のことを書き綴っていたが、ふとペンをおいた時思った。あれほど蓬だんごを好きだったやっちゃんは現在入院中、退院のあかつきにはわが家の庭隅に群れ生う「サッポロ」の蓬を摘み、蓬だんごを作ってあげよう。そして全快祝いをしてあげよう。きっときっと！　・・・と。

高野名幸作日記を読んで

池田テル

私の幼い日の記憶は、ほとんどが鰊場の浜である。鰊が群来て、広い浜がたちまち人と鰊にあふれ、活気に満ちた浜の光景がいつも思い出される。

「たかむい」に連載されている『高野名幸作日記』を読むと、当時のことが余すところなく書かれていて、継続されたことに頭の垂れる思い。古平に生まれ、古平で永く生きてきた私には思い当たることが多い。この日記をわがことのように楽しく、また、嬉しく読み返している。

現在、書店を経営されている高野名さんは、私の物心のついた頃は漁網店であった。父の使いで、一年生の頃からたびたび鰊刺網用の綿糸などを買いに行ったことがあり、お父さんはいつも優しい言葉をかけて品物を渡してくれた。私の家は鰊の刺網が主だったので、父は冬になると、夜遅くまで網の修理をして現れる。

「鰊がくるぞォ！」

誰言うとなく、鰊の話に町ははずんできた。畑方面から馬そりが鈴を鳴らしながら、鰊場の品物を積んでは次々と浜の方へ向かって行く。

私の家でも鰊場の道具や、当分の生活に間に合うだけの物を運んで浜の家へ移る。

建網のところでは本州方面から来た若い衆が大勢出て、雪を掘り船を出している。数日もすると大小の船が浜に並び、前浜の沖には枠船が一定の間隔でもやい、鰊の群来を待つ人々は昼夜の別なく浜辺を行き来している。暗い道をランプや提灯（ちょうちん）の灯りの動きが早い。一獲千金の機会は寸秒の勝負だと聞く。

浜一面提灯のあかり増え
ゆきてせはしき人影鰊来し夜
定置網起こす掛け声ひびく朝
開けの浜は忽ち人あふれたり
鰊運ぶモッコを背負ひて続く
列暮るれば浜に母を待つ子ら

『高野名幸作日記』が五〇回続き、往時を思い出してペンを持ちました。

歌声は海を越えて——

室谷忠雄

もう一〇年程も前になりますが、秋田県能代市の七夕祭を見に行ったときのことです。古平の鰊の網起こしのときに歌われる歌と、船を漕ぐときの掛け声と全く同じものが、ここの七夕祭で聞いたのです。

私が、古平を離れる中学一年の頃まで何度か聞いていましたことを思い出す。

二月の太陽が雪の町に光を返す頃、空には多くの海猫（ゴメ）が

したから、それがどうして秋田の能代にあるのか、しばらく考え込んでいました。

平成九年に古平に来て、私自身のルーツを調べるために古平町史を借りて読んだのですが、そこに江戸時代の後期、松前藩ではなく秋田藩も来て、蝦夷地の警備についていた時期があったことが書かれていました。

鰊漁業の盛んだったこの頃ですから、ましてや踊り好き、民謡好きな秋田の人たち（現に民謡全国大会の数は日本一、お囃子では日本三大囃子のひとつ花輪囃子など）、そこから積丹地方へ流れてきたのではないかとも想像しています。

鰊の時期には秋田・山形・新潟方面から大勢の人たちが出稼ぎに来ていましたし、歴史の古い土地から新しい土地へと、秋田と積丹地方に同じ歌や囃子があってもおかしくはない、そんな気がするのです。

短歌

古平町岬短歌会

一月ぶりに退院し来ぬ日当りの草にまじりてサフラン咲けり　奥山きよみ

わがために日夜はげめるヘルパーさん車のライトさし込む病室に　竹内コト

空仰ぎ鰊曇りを言う君と遠き鰊場の思ひ出語る　池田テル

両の手にワープロ操作したちどころに縦書き文書を出来(でか)しぬ孫は　鈴木時子

俳句

古平ホトトギス会

満開の花に浮き立つ正隆寺　斉藤波留

節くれし老母の指の新茶かな　山口悦子

夕映の春菊も摘み温泉の帰り　越野敏雄

年毎に蕾の増えし庭の梅　大和田絵伊

春の空鴉軍団鳶を攻め　福井幸平

少しずつ日脚のびゆき今日の海朝焼に染まり美しきかな　堀典子

春網の期待裏切る漁模様追ひ打ちかけてトドの来たれり　田中香苗

五十年はうたかたと過ぎて札幌に友らと集ひ寝ねず語りぬ　山口スヱ

紺碧の海に並びぬ定置網イカの水揚げ待つ日続けり　丹後初江

崖のこじゃく朽葉の下に萌えたれば摘み来ぬ春のさきがけとして　東美知

裏は路地はずかしそうな踊り子草　関口勝志

片道に自転車寝かせ蕗を採る　よしざきり

齢なる母は譲らじ月朧　仲谷比呂古

対岸の雄冬五月や残る雪　室谷弘子

孫だいてすもゝの花の散歩道　泉清三